

ミュージアム 通信

紅花から 小町紅ができるまで 後編

[資料室談議 第5回]

『都風俗化粧伝』等より抜粋・解説
お歯黒化粧【前編】

[講座レポート]

10/21 和のしつらい講座

11/17 江戸の化粧再現講座



江戸名所四季の眺 隅田川雪中の図(部分)・広重・国立国会図書館 所蔵

紅花から小町紅ができるまで 後編

江戸で初めて
紅製造問屋を開く

前号では紅花摘みから紅餅作りまでを掲載したが、今号では伊勢半本店の興りと小町紅の製法を紹介する。

伊勢半本店が紅製造問屋として、現在の日本橋小舟町一丁目創業したのは、化粧の習慣が一般庶民まで広がった江戸後期、文政八年のこと。創業者の澤田半右衛門は十代半ばに故郷の川越を立上り、日本橋通油町(現日本橋大伝馬町三丁目)の紅白粉小問物問屋で二十余年の修行を積み、三十六歳のときに独立したのであった。その際、「伊勢屋」という呉服店から株を購入したため、店名は「伊勢屋半右衛門」、屋号で「伊勢半」と呼ばれるようになった。江戸時代の日本橋と言えば、三井越後屋や白木屋といった大店の呉服店を

はじめ、様々な店が建ち並ぶ商業の中心地。当時、化粧用の紅は京都で製造されるのが常で、江戸では問屋・販売業のみが営まれていたが、澤田半右衛門は「江戸の女性を美しくしたい」という情熱を胸に、日夜紅作りで没頭した。独自の工夫と試行を重ねた末、ついに京都製に劣らぬ品質の江戸製紅を開発したのだった。玉虫色に輝く伊勢半本店の紅は、瞬く間に江戸で評判となり、順風満帆に商売は発展していったのである。

連続と継承される 伝統の紅作り

初代から伝わる伊勢半本店の紅作りは、一子相伝・口伝により受け継がれてきた。現在は、七代目・澤田一郎の下、紅匠（紅職人）に受け継がれている。紅作りは、職人の経験から培った勘に頼る部分が多く、マニュアルを見て会得できるものではないが、その概略を解説する。



① 清水を溜めた桶の中に紅餅を入れて一晚漬ける。② 紅餅を漬けた液にアルカリ溶液を加え、「ゾク」と呼ばれる麻の束を浸して紅色色素を染めつける。この染めつけ作業を何度も繰り返し、回を重ねるごとに、ゾクが美しい紅色に染まってくる。③ ゾクを絞った濃縮液に酸を加え、紅の色素を分離させる。この酸の加え方が最も難しく、職人の腕の見せ所。微妙な量の違いや攪拌の仕方では紅は青みや黒みを帯びたり、艶が失われる。職人は液の泡立ちや泡の色、微妙な変化を読みとりながら、最も適した酸の量を熟練の勘で見極める。④ 紅の粒子が沈殿した濃縮液を、羽二重をかけたセイロに流し入れ、紅を抽出する。数時間水分が切れて、重ねるとポックリと盛り上がる固さの紅ができあがる。⑤ 抽出した紅をお猪口の内側に刷毛で刷いた後、竹へらでムラ



をなくす。その後、自然乾燥させる。

以上の行程により小町紅は完成する。

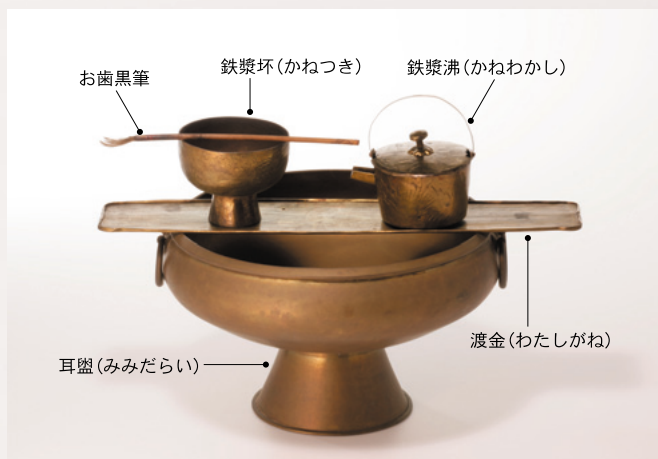
玉虫色の紅は、最上紅花と職人の卓越した技により生まれる逸品。今年も九月初旬頃、伊勢半本店には、「最上紅花」を加工した紅餅が山形より届いた。そして、今日も変わらぬ製法で紅作りが行われている。江戸から続く最後の紅屋・伊勢半本店では、日本の赤、紅を後世に伝えるために、伝統的な製法を守るとともに、紅の新しい価値の創造に努めている。

『みやこふうぞくけわいでん都風俗化粧伝』等より抜粋・解説

お歯黒化粧〔前編〕

幕

末・明治維新の激動期日本を、イギリス外交官の視点から客観的に記した『一外交官の見た明治維新』の中に、お歯黒について言及した箇所



がある。それによれば、女性の美しい容貌も、お歯黒と白粉化粧によって「台無し」になっているという。外交官が抱いた率直なこの感想は、今の我々がお歯黒に感じる印象と大差ない。真つ黒な歯を好意的に捉える感覚を備えた現代人が果たしてどの程度いるだろうか。

しかし、江戸時代の女性にとつてお歯黒化粧とは、年齢や職業、身分を示す特徴であり、隙間なく板を並べたような真つ黒な歯は美人の条件でもあった。また、お歯黒は「黒色がほかの何色にも染まらない」ことから「貞女二夫にまみえず」の諺にあるように貞節を示した。色むらがあつたりすると



江戸時代に未婚・既婚女性を象徴する化粧だったお歯黒。起源の詳細は不明だが、白粉化粧や紅化粧に比べてその歴史は古く、すでに『魏志倭人伝』や『後漢書』東夷伝中にお歯黒に関する記述が見える。

男性の目に好ましく映らなかつたようで、黒味が濃ければ濃いほど良しとされた。それゆえ、艶出しのためにお歯黒を塗った上から紅を重ねることもあつたほどだ。

ところで、お歯黒の原料とはそもそも何か。それは、五倍子粉(ふしのこ)とお歯黒水である。

五倍子粉とは、ウルシ科の落葉高木ヌルデの若葉などに虫が寄生してできた虫こぶを砕いたもので、主成分はタンニン酸である。一方のお歯黒水とは、鉄漿水(かねみず)とも言い、錆びた釘や針などの古鉄と、米の砥ぎ汁や酢・酒などを共に壺の中にに入れて漬け、化学反応させてできた酢酸第一

鉄を主とする混合液のことである。つまりお歯黒とは、タンニンと酢酸第一鉄とを化合させたものということになる。

では、実際にお歯黒はどのような手順で塗られたのか。簡単に述べると次の①～④のようになる。

- ①お歯黒水を沸かし、鉄漿杯に注ぐ。
- ②お歯黒水をお歯黒筆に含ませて歯に塗る。
- ③その上から五倍子粉を塗り付ける。
- ④②～③を数度繰り返す。

なお、お歯黒を付け終わった後の口中は非常に苦く、うがいが必要であったという。また、お歯黒水は沸かすと悪臭を放つたため、当時の女性は家人の起床前にお歯黒化粧を終えていたようだ。

◆ミュージアム講座レポート◆

伊勢半本店紅ミュージアムでは、紅や日本文化をテーマにした講座を定期的に開催。今秋開催した講座をご紹介します。

『第二回 和のしつらい講座』 ～七五三のしつらい～

～二〇〇七年十月二十一日～

室礼三千主宰 山本三千子先生を講師に迎え、「七五三のしつらい」を学びました。初めにしつらいの基本と七五三についてお話いただきました。その後、千歳飴や手毬、簪などを使って、参加者の方が七五三のしつらいを実践。作品は、自宅にお持ち帰りいただきます。季節の室礼が学べる講座は毎回好評。次回は、二月に「雛祭り」をテーマに開催します。



館内に施した「七五三のしつらい」

『第二回 江戸の化粧再現講座』 ～秋の外出時のメイク～

～二〇〇七年十一月十七日～

講座では『都風俗化粧伝』『容顔美艶考』をテキストに、秋の外出時に適した化粧を提案。当館学芸員の解説とともに、化粧のデモンストラーションをご覧いただきました。



使用した化粧品は紅・白粉・墨の基本の三色と、肌を整える化粧水等です。江戸時代、外出時の化粧としてよしとされたのが、「中白粉」という地肌が見えるか見えないか程度の濃さの白粉化粧。これに秋の肌トラブル「くすみ」対策として、下地に紅を置く化粧法を加えて再現しました。初めに通常の中白粉と、紅を下地に置いた場合の中白粉との違いを見ていただくために、半顔ずつ化粧を施しました。その後、

半顔モデルに代わって、下地に紅を置いた中白粉を全顔に施したモデルが登場。眉を描き、口紅を点して化粧を完成させました。下地に紅を置いた中化粧は、ほんのりとチークを入れたような仕上がりが、明るく健康的に見える、皆さん感心していらっしゃいました。江戸化粧の研究成果は、今後も発表していきます。

Information

かわら版

イベント＆講座のご案内

■「第3回和のしつらい講座～雛祭りのしつらい～」

「しつらい」とは、室内の調度品を四季折々の変化に合わせて調える習わし。雛祭りは、何歳になっても女性が心華やぐ年中行事です。「しつらい」を学んで素敵な雛祭りをお迎えてください。

要予約・定員20名・講座費2,500円

2008年2月17日(日) 午後2時～4時

■日本の赤「紅」を知る

紅の色って？ 紅を点すって？ 普段「紅」に触れる機会がない方に、試していただくための講座です。

要予約・定員8名・参加費無料

2008年3月29日(土) 午後2時～3時30分「さくらメイク」

※内容・申込詳細は、ホームページに掲載いたします。

新商品発売のご案内

伊勢半本店では、2月5日(火)～3月30日(日)の間、小町町『手毬』を数量限定発売いたします。

写真の器の他に、雛祭り用として、新しいデザインの器が仲間入り。女の子様が初めて点す口紅には、本紅をおすすめいたします。



Since 1825

伊勢半本店 ミュージアムのご案内

●開館時間／午前11時～午後7時 ●休館日／毎週月曜日 ●入場無料
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>